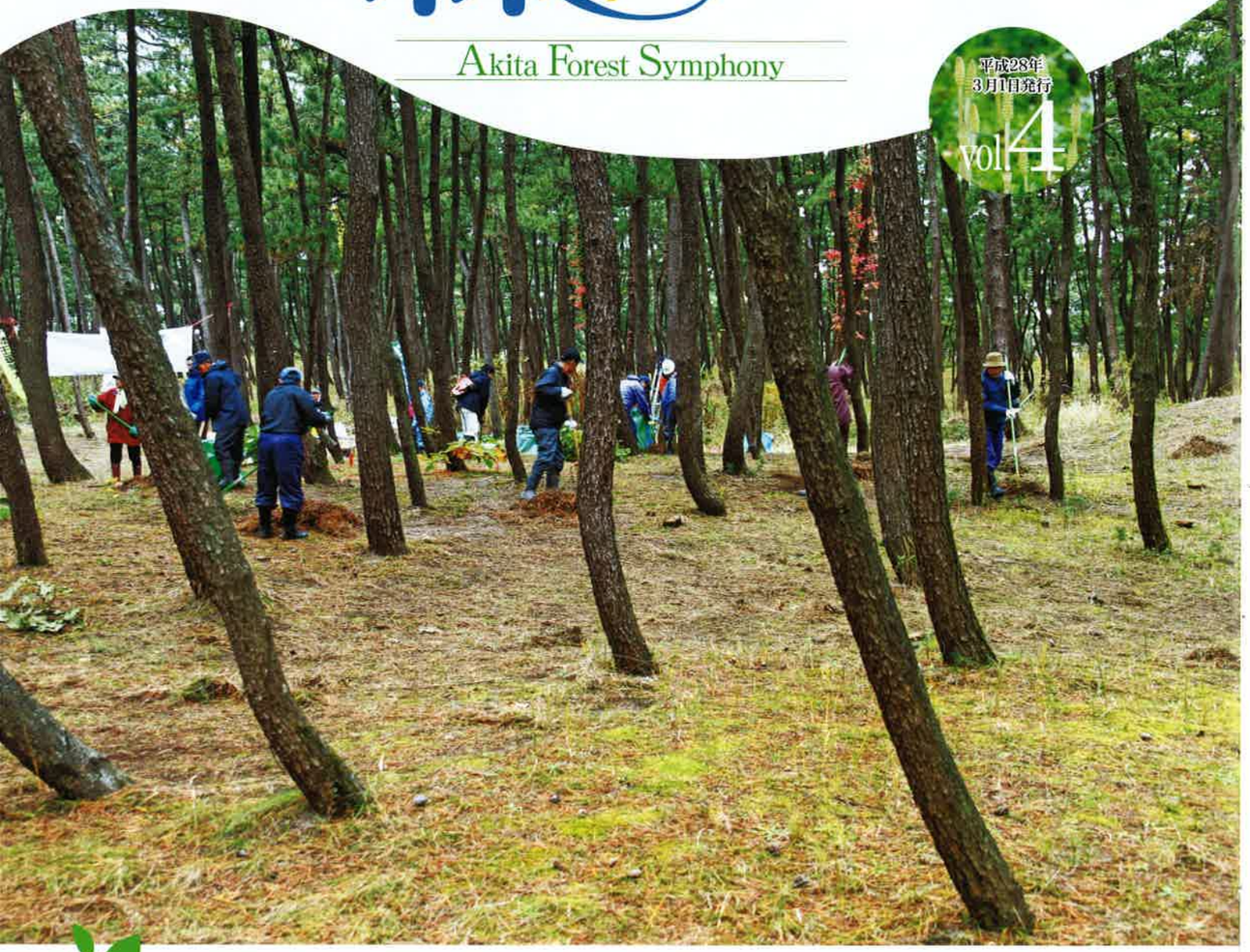
森を渡る風のささやき・渓流のせせらぎ・野鳥のさえずり・そして森に集う人々の声

森林ボランティア情報誌

あきた森のシンフォニー

Akita Forest Symphony



●表紙について●

2015年10月31日、秋田県由利地域振興局主催の「松林健全化ボランティア作業」が、由利本荘市石脇の本荘マリーナ周辺及びにかほ市金浦の温泉保養センター「はまなす」向かいの海岸林の2会場で開催された。

海岸林では、落ち葉の堆積により、それを放置すれば、土壌が肥沃化し、海岸林を構成する主樹種のクロマツにとって生育に悪影響を与える。そこで、健全な海岸林の育成を図るため、平成20年からボランティア活動などによって、林内に堆積した落ち葉や腐葉土等を除去し、クロマツの生育環境を良好に保とうとする作業を継続して実施している。当日は、森林ボランティアの方々や地域の皆さんなど、両会場に併せて約130名が参加した。

CONTENTS

特集／森に集う仲間たち－2
「森林と健康」への挑戦
佐藤清太郎さんと秋田森の会・風のハーモニーの取り組み

みんなで行動 森づくり－6
森づくり税 2015活動報告

緑とともに生きる《緑のムラ》－12
鳥海マタギの里「百宅」

インフォメーション－14

頑張る森林ボランティア－16
枯れ木も山の宝なり？

あきた森のシンフォニー vol.4
平成28年3月1日発行
編集・発行／あきた森づくり活動サポートセンター／愛称：モリエールあきた
〒019-2611 秋田県秋田市河辺戸島字上祭沢38-4 プラザクリプトン内
TEL 018-882-5570 FAX 018-882-5571
印刷／有限会社バレア

枯れ木も山の宝なり？

炭やきで夕日の松原まもり隊 会長　高橋　金蔵

「夕日の松原」は秋田市飯島から潟上市にかけて広がる約950haの海岸砂丘林です。私たちは、このマツ林に発生するマツ枯れ被害木を発見し、炭化して枯れ木を生物資源として再利用する活動を継続中です。

炭やきで夕日の松原まもり隊としての活動は2007年9月ですが、その原点は、2002年に5～6人で始めた気ままな活動です。当初の"ゆるいつながり"が今では会員数130人を超え、これまで148回（2016年1月時点）の炭出しで4000本以上を炭化しました。木炭や木酢液は参加者が自由に持ち帰れます。

老若男女、炭やきに参加

マツ枯れ病のしくみを学ぶ

初代会長の故鈴木勝男さんや小林一三秋田県立大名誉教授の熱意によって、被害木を処分するのではなく、被害木中に潜んで翌年に病気を拡散させるカミキリムシを駆除する、防砂林を作った先人たちの努力を無にしない、という会の基本認識が形成されました。

普段は子供や学生さんから年長者まで幅広い世代で炭やきを楽しみながら、現地見学や講習会も開催しています。毎回の炭出しの結果は「炭やき・松くい虫情報」（通称 炭やき通信）にて、松林の被害状況等とあわせて情報共有しています。

みんなで薪割り大会（焚き付け用）

市民参加型のマツ枯れ防除

2009年から会の有志で月1回の松林の見回りを開始、炭やきの材料を得つつ松林の被害を"監視"し（県の森林ボランティア活動支援事業費補助事業）、県立大森林科学研究室と連携して枯死した時期によって防除の優先順位をつけています。

2013年からは秋田の森林活用地域協議会森林・山村多面的機能発揮対策交付金事業で間伐を行っています。太い／細いや枯死原因を問わず夏～秋に枯死したものは等しく翌年の被害拡大につながることから、この間伐事業もマツ枯れの防除に有効です。

おかげさまで、私たちの活動エリアは薬剤散布なしに被害を抑えられています。楽しく「ゆるい」つながりの会ですので、仲間に入りたい方、いつでも歓迎です！

枯れた時期や状態ごとに異なる標識が付けられる（枯死木探索）

バケツリレー方式で丸太を炭窯へ搬入

特集 森に集う仲間たち

「森林と健康」への挑戦

佐藤清太郎さんと秋田森の会・風のハーモニーの取り組み

風が　歌います
水が　かたります
樹は　ささやきます
花は　問いかけます　，
そして人はやさしくなります
職業や年齢が異なっても
自然を愛する心は一つです
良い仲間との出合いも楽しみに

誕生して今年で25年目になる「秋田森の会・風のハーモニー」は、秋田市下浜で森林を経営する佐藤清太郎さんが代表を務め、約３００名の会員がいる。

会の活動場所は、清太郎さんの所有する森林の一部を、会員に開放して名付けた『健康の森』。こういった取り組みは、当時としては、全国的にも珍しいことであった。

標高70mほどの、なだらかなこの森で、会員は、森の声を聞こうと耳を澄ませたり、路傍の草花を愛でたりしながらゆっくり散策をする。そして、森からの恵みを少し分けてもらうことも、この森を訪れる楽しみの一つである。子供でも、家族連れでも、お年寄りでも、自分のペースで歩き、遊び、森の時間にあわせながらこの時を過ごしていく。

森林経営に取り組む

お年寄りも自分のペースで森林浴

佐藤清太郎さんは、１９４４年秋田市下浜に生まれる。家は、大きな面積の森林を所有しており、当時は農林業を中心に、冬は炭焼きで生計を立てていたそうだ。

清太郎さんは、家督を継ぐべき長男として、祖父や父と山を歩きながら、山に入るための掟や山の恵みをいただく心得などを教えられたという。祖父に連れられてスギを植えたとき、「この山もこのスギも全部おまえのものだから、良く手入れをして育てるのだよ。」と言われた時のうれしさは、今でも鮮明に覚えているという。

高校を卒業すると国内留学実修生として、長野県の花卉栽培農家で６か月間研修を積んだ後に帰省、花卉栽培に取り組んだ。しかし、出荷時期の超繁忙や、気候に左右されて安定した経営が難しいことから徐々に栽培面積を減らし、引き継いだ森林の経営に取り組むこととなる。

清太郎さんは、精英樹を植栽してその生育具合を確認したり、木材の搬出機材の開発・改良に取り組んだり、環境に適応した植栽技術を模索するなど、新たな林業技術の実践に積極的に関与してきた。こういった取り組みは、模範的な林業後継者と評価され、昭和55年には秋田県の青年林業士として認定される。

そして、林業研究グループ活動や林業後継者の育成活動にも力を注ぎ、林業の振興・発展に積極的に発言してきた。そういう姿勢が評価され、㈳秋田県林業後継者会議会長や秋田県林業改良普及協会理事などの役職も歴任した。

このように森林経営に携わる中で、若い頃から暖めていた構想がある。それは、「森林と人間の共生・共存」であった。「森林を林業の場としてだけではなく、何か他に森林を利用した活動が出来ないものだろうか。」と常に考えていたという。

秋田森の会・風のハーモニー誕生

台風被害の跡地にみんなで植樹した

清太郎さんが、東京での全国会議に出席したとき、偶然に地元出身のお医者さんと再会する。近況報告などを述べあうなかで、「これから迎える高齢化社会の中で、ふるさとの自然は見直される。特に森林は、人間の心を癒やしてくれる。」という言葉に、これまで頭の隅あった考えが具体的な姿を現す。

「高齢者でも気軽に訪れることの出来る森をキーワードとして考えてみよう。」

森林を活用して心身のリフレッシュや、森を歩くことでリハビリテーション効果が発揮できないものか。この考えを実践に移すため、これまでお付き合いいただいた方々に相談しながら具体化させたのが、『森林と健康』をテーマとした会、「秋田森の会・風のハーモニー」なのである。

1991年9月5日、14名の親しい仲間が集まり、会が発足する。オープニングイベントを企画していた9月28日、台風19号が上陸、猛烈な風が吹きすさび、イベントは中止となる。風が落ち着いた午後、森林を見回りにいくと、植栽して70年を越える秋田スギが根こそぎ倒れていたり、幹の途中から折れていたりと、見るも無惨な姿を呈していた。再イベントの翌月、多くの会員が集まってくれ、折れたり倒れたりした木を集め供養してくれた。そして、多くの励ましの言葉を掛けていただき、勇気づけられたという。

被害の実態を調査し、これまでの森づくりを振り返ると、この災害で得ることが多く、今後のあり方を示してくれたと、前向きに考えるようにしたという。

会員へ開放した『健康の森』は、面積で約30ha、東京ドームに換算すると6個半に相当する。コナラを中心とした広葉樹林と秋田スギの人工林がほどよく混じり合った森の尾根筋を、曲がりくねった1本の作業道が通り、それから分かれて数本の歩道が森の奥へと誘ってくれる。

『健康の森』のほぼ中央、小さな池のある広場には、『朝日森林文化賞』受賞記念の石碑や、落雷で造形された杉大木のモニュメント、シイタケの榾木が置かれている。さらに奥へ進むと、見通しの良い尾根に到着する。ここは、日本海からの風を感じることの出来る場所で、暑い日にここまで来ると噴き出す汗に風が心地良い。一番奥まったところには水芭蕉の群生地が広がる。早春の森林浴が行われる4月29日頃は、白い花の見頃となる。

数多くの樹種、四季折々に姿を見せる草花、そして野鳥や野生の生き物たちが見られる賑やかな森、これが『健康の森』なのだ。

中央広場にある池と記念の石碑

会のテーマ「森林と健康」とは

清太郎さんは言う。「森林浴や森遊びを通じて、ありのままの森に親しんでもらうことで、人は心も身体も健康になります。そして、森に人々が訪れて木を植えたり、刈り払いなどして手を入れたりすると、いろんな昆虫や鳥や獣が棲み、また植生も豊かになる。それで森林は健康になるのです。」

高齢者でも気軽に入れる森、森林を活用したリハビリや炭焼き体験などの活動は、環境を健康に結び付けた経営と評価され、平成7年に朝日森林文化賞を贈呈さる。このことがきっかけで、会と清太郎さんのことが全国的に知られることとなり、全国からこういった活動に関心のある団体や、ジャーナリストや、大学の先生なども訪れる森となった。

その方々と一緒に森を歩きながら多くのことを学び、それを実践してきた。訪問者と会員の交流、そして、仲間が仲間を呼び、会の活動は、いろいろな分野に広がっていく。園児が森を訪れる「森の保育園」(H7～)、首都圏の親子と地域の交流を行った『雪と森と子どもたちin秋田』(H12)、森林・林業体験のリフレッシュ効果の実証に挑戦する『秋田農山村健康院モデル事業』(H16)などに挑戦をしてきた。

その一つが、平成15年から5カ年間実施した『子どもたちがつくる海岸林』活動である。清太郎さんの「健康の森だけでなく、地域の森をみんなでつくってみよう」という考えのもと、松くい虫の被害で枯れた地元下浜の海岸林の再生に取り組んだもので、当日は200名の園児や生徒、さらに200名の地域住民などが参加した。

植栽されて12年、みんなで植えた30㎝位の苗木が根を張り、樹高が3mにもなり、着実にその生育が目に見えるようになってきた。海岸沿いの厳しい環境に耐え、大きくなって海岸林の仲間になろうとするその木々たちの逞しさ。「自分たちが植えたんだよ!」という誇りを、持ってその姿を見てもらいたい。

海岸林をつくろう！クロマツやカシワの苗木を植えました

賑やかな森「森の保育園」

今日も見慣れたマイクロバスが向かってくる。自宅前に到着すると、同じ色の帽子を被った子どもたちが降りてくる。年に数回訪れる4歳の園児たちだ。

元気な挨拶を交わしたあと、清太郎さんが森に向かう前に必ず約束してもらうことがある。

「この森には危険なところ、危ない生き物もいるので、3つのことを守ってくださいね。それは、疲れたら休んでも良いから自分の力で歩くこと。自分の判断で怖い、危ないと感じたら近づかないこと、そして、何をやっても良いが人のせいにしないこと、自分の責任でやること。」、そして先生方にお願いするのは、「危ないからやめなさいという言葉を出来るだけ使わず、危ない遊びをしている子供や危険な場所を発見したら、早めにそういった場所へ行って見守ること。この森では、子どもたちに『生きる力』、その場その場で『対応する力』、全てのものと『戦う力』、『仲間と協力する力』を目覚めさせるよう手助けしてください。」

園児たちは森で大はしゃぎ

森に着くと、早速楽しい森遊びがはじまる。急な山の斜面を登ったり下ったり、池の丸木橋渡りに挑戦したりと、「危ないからやめなさい」という言葉から開放された園児たちは、森の中で躍動し、いたるところで歓声が上がる。今まで眠っていた森がビックリして目を覚まし、子どもたちの遊びを見つめているようだ。帰りのあいさつは、「森さん、また来るからね!」何かを成し遂げたような満足そうな顔、腕白を取り戻したような快活な顔になってバスに乗り込む。

いま、森が大切だ、大事だと思えなくてもいい。子供の頃、心に播かれた『森』というタネは、どのように生長していくであろうか。この子どもたちはいつか森を訪れるであろう。この時、森にどんなメッセージを届けてくれるのだろうか。

森が贈る喜び、そして交流

清太郎さんは言う。「森が人間を育ててくれると強く感じる。森から帰ってくると、みんな生き生きした顔になっている。森で、何かを感じ取ったのでしょう。」

森には、まだまだ隠されている魅力がある。きれいな水や空気を育む森、森林が育んできた文化、そういったことをさりげなく発信していきたい。そして、森が創り出す豊かな環境で、子どもたちに育ってもらいたい。森を慈しむ心を持ち、多くの人々が森を訪れることで、地域の人々も元気になる。こういった取り組みが全国の山村で拡がっていくと、また新たな山村社会・文化が形づくられるのではないのだろうか。そういったことを思いながら、清太郎さんは森づくりに向かう。

4月29日昭和の日、恒例となった早春の森林浴と総会が開催される。森へ散策に向かう会員、昼食の準備に取りかかる会員と、それぞれが自分の楽しみを求めて行動する。食材は、春の森からの宅急便、シイタケ、チマキザサのタケノコ、コゴミやシドケといった山菜が調理される。待ち続けた春の訪れを味わい、みんなの顔がほころぶ。

そして、再び巡る4月29日、いつもの顔ぶれ、新しい仲間が駆け付けて来る。再開、そして新しい出合いが萌黄色の『健康の森』で繰り広げられるのです。

秋田県水と緑の森づくり税事業

みんなで行動森づくり 2015 活動報告

地球温暖化をはじめとする環境問題への関心が高まるなか
様々な森林ボランティア活動が年々活発に行われています。
「秋田県水と緑の森づくり税事業」を活用した活動事例の一部をご紹介します。

大仙市

森林ボランティアによる桜の森づくり 《6月28日・10月25日》

場　　所●大仙市長野山地内
実施主体●八乙女山を守る会

昭和50年代八乙女山は全山桜の花で覆われていましたが、大正期に植栽されたソメイヨシノの老木化が進み本数も激減してしまいました。かつてのように全山桜山になる事を願い、税事業を活用した活動がスタートしました。

市民に広報で呼びかけ森林ボランティア作業を行って今回で７回目。春作業（６月）は、刈り払いやツル外しを行い、秋作業（10月）は刈り払いと施肥（パイルの打ち込み）です。小学生とタイアップし、地元の歴史を勉強する等、教育環境の場にもなっている。

また、会員でもある樹木医の指導で、テングス病の枝切り作業を冬期に実施するなど、年間を通した活動に取り組んでいます。

樹木医指導のもとテング巣病切除作業に汗する

刈り払いやツル外しを行う親子

草丈が高い刈り払い作業を頑張る

参加者のみんなで記念撮影

みんなで行動森づくり

湯沢市

自然観察と植樹の会 《6月4日》

場　　所●湯沢市杉沢「新所ふれあいの森ひろば」
実施主体●新所森づくりボランティアの会

湯沢市杉沢新所地区は、山の麓にりんご園が広がり、りんご栽培が盛んでしたが、農家の高齢化や後継者不足等により放棄され藪となるりんご園が年々増えていきました。新所森づくりボランティアの会では、藪だらけとなった場所を近くの住民が集まる憩いの場にしようと平成22年から植樹活動を行っています。

今年は湯沢市立湯沢東小学校４年生65名が参加し、グループに分かれて、ナナカママド、ヤマモミジ、ヤエザクラを合計10本植えました。あいにくの雨模様でしたが、会員から植え方を教わり、丁寧に苗木を植え、名前の書いた木杭を横に打ち込みました。植樹の後は、会場付近を散策し、身近に生息している草花等を観察しました。生徒たちは、自然にいっぱいふれた一日となりました。

（雄勝地域振興局森づくり推進課提供）

みんなで植えたヤマモミジ、しっかり根付くように願いを込めて！

森づくり活動に集まった頼もしき生徒たち

身近な自然のことも学びました

鹿角市

魚の暮らしやすい川を目指し植樹活動を実施 《9月25日》

場　　所●鹿角市十和田大湯中滝ふるさと学舎敷地内
実施主体●鹿角市河川漁業協同組合

鹿角市河川漁業協同組合では、米代川の清流化を図り、「魚の暮らしやすい川づくり」を目指して、平成19年度から米代川上流部に位置する田代平で植樹祭を開催し、これまでの植樹本数は、ブナなど広葉樹3,600本になります。

今年の植樹祭は、中滝ふるさと学舎敷地内で開催、鹿角市立大湯小学校５年生、県森林ボランティア、県、市、米代東部森林管理署などから約65名が参加し、ヤマモミジ、ベニヤマザクラ、ブナなど計600本を植樹しました。

参加者は、植えた苗の回りにそっと土をかけ、満足そうな表情を見せていました。宮野和秀組合長は、「植樹を続けて、魚の住みやすい場所づくり、人々が癒やされる森づくりを進めていきたい」と話していました。

（鹿角地域振興局森づくり推進課提供）

参加者みんなが森づくりです

石ころだらけで植え穴掘りに一苦労

植樹の方法を学ぶ。熱心に聞く生徒たち

八峰町

育てよう！山の森　海の森　《10月４日》

場　　所●八峰町八森「ナメトコ沢」
実施主体●ＮＰＯ法人白神ネイチャー協会

世界遺産に登録された白神山地、その周辺をブナの森にしようと植樹活動を行っています。

「山の森」を復元することによって、良質で良好な水が海を潤します。すると、ハタハタなどの魚類の産卵ふ化する藻場「海の森」に再生につながります。地域の保全を図り、良好な環境を次世代へ継承していくことを目指して、白神の森にブナを植え続けて今年で16回目となります。

この日のため、植樹ボランティアを募集したところ、いつも参加してくれるイオンチアーズクラブ会員や、県外から駆け付けてくれるリピーターなど応募、直ぐに定数となりました。

当日は、天候にも恵まれ、190人を超える参加者が450本の苗木を白神の森に植えました。

作業終了後、秋田県漁業協同組合所属の漁協婦人部から、この植樹会恒例の「つみれ鍋」が振る舞われ、秋の一日森林ボランティア作業を楽しみました。

（ＮＰＯ法人白神ネイチャー協会提供）

これから植える苗木をもって先ずは記念撮影

お父さんと一緒に植えた。標柱にメッセージ印します

鍬を振るい、ブナの苗木を植えていく

心地良い汗を流し、大きくなることを祈りながら

藤里町

森づくり体験を通じて森林を学ぶ　《10月９日》

場　　所●藤里町粕毛阿弥陀岱地内
実施主体●秋田県立能代養護学校ＰＴＡ
協　　力●ＮＰＯ法人あきた白神の森倶楽部

能代養護学校は、「みどりいっぱいの町をつくる」をキーワードに、地域の美化・緑化に貢献する活動を継続しています。今年から、秋田県水と緑の森づくり税・県民提案事業を活用し、スギやブナの育苗体験や植栽体験活動に取り組み、森林の働きや理解を深めることとしました。

植樹体験のこの日は、高等部の生徒約40人と教員が参加し、ＮＰＯ法人あきた白神の森倶楽部の手ほどきを受けながら、スギの苗木180本を植栽しました。

この日は、朝から雨が降ったり止んだりしていたものの、作業を開始する頃は雨も上がり、植えられた苗木を眺めてみんな満足そうでした。

（NPO法人あきた白神の森倶楽部提供）

あいにくの雨模様、苗木の根つきには良いかも

二人一組になって植えていきます

先生たちはブナの苗木を植栽。みんなで記念の標柱を立てました

秋田市

「みんなで造ろう海岸林」《10月17日》

場　　所●秋田市飯島の海岸林
実施主体●秋田県「海岸林再生植樹デー」

秋田県では、県民参加型の植樹イベント「海岸林再生植樹デー」を10月17日に秋田市飯島の海岸林で開催、森林ボランティアや地域住民など県内各地から約80名が集いました。

開会式では、秋田県農林水産部森林整備課の佐藤龍司課長が、「海岸林は、季節風や飛ぶ砂から、周辺に住む人々の生活を守ってくれるほか、津波の勢いを弱めてくれる効果がある。東日本大震災では、海岸林は大きな被害を受けたが、昭和58年に本県を中心に被害のあった日本海中部沖地震による津波は、海岸林が津波の勢いを弱め、内陸の侵入を食い止めてくれた。このような多くの働きをする海岸林を、皆さんのお力をお借りして造り上げていきたい。」と挨拶をしました。

植樹方法の説明を受けた後、それぞれ区割りされたエリアへ移動し、予め掘られた植え穴に堆肥などを入れ、30cmほどに育ったクロマツの苗木をていねいに植えて行きました。

この季節としては暑くなったこの日、県内で植樹活動を行っている参加者は、「山での植樹は、穴掘りに手間取ったり、斜面が急で作業が困難だけれど、海岸は砂も柔らかいし楽だね。」と言いながらも汗だくで作業し、用意された400本の苗木が1時間程度で植え付けられました。

グループ毎に植栽。子どもたちも頑張って植えました

植樹を終え、参加者みんなで記念撮影です。青空が気持ちのいい１日でした

職場の仲間で参加しました。一列に並んで植栽し、しっかり根付くように踏みしめます

植栽完了。約1時間かけて植え終わりました

秋田市

「きずなの森」で森林(もり)づくり作業体験　《10月17日》

場　　所●秋田市河辺神内地内
実施主体●海御野場連合町内会
協　　賛●森と木の国「あきた」21森林づくり隊

町内会員が自然の大切さを学び、環境の保全を次世代に継承する目的で、森林(もり)づくりの作業体験を行い、今回で８回を数えます。

絶好の秋日和となったこの日35名が参加し、森林をきれいにする活動に心地良い汗をかいてました。今回の作業内容は、植栽地の刈り払い・歩道の整備・桜の植栽を行いましたが、作業経験者が多く手際良く取り組んでいました。

また、自然木の幹や枝を使った手製の遊具に、子供たちは歓声を上げて秋の１日を楽しみました。

遊具で子供同士のふれあいや親子の絆が深められた

歩道の整備を女性会員も参加して行われた

樹高測定の実技研修も行われた

親子で参加した町内会のみなさん

由利本荘市

森の働きを学ぼう「里山スクール」　《10月27日》

場　　所●由利本荘市東由利法内「山遊庭の森」
実施主体●東由利林業懇話会

紅葉がはじまった頃、阿部重助さん所有の「山遊庭の森」に、東由利小学校の３年生と４年生が訪れました。

「近くに里山があるにもかかわらず、子どもたちは山で遊ぶということがなくなった。子どもたちに改めて身近な里山に興味を持ってもらいたい。」、そんな願いから始まったこの里山スクール、今年で６年目となります。

体験の前に、森の働きや、これから行う作業の必要性について説明です。

さて作業開始、３年生が下草刈りの作業するこの森は、今は中学２年生になった先輩たちが植えたスギ、１本１本責任を持って刈り払うと、スギの子が顔を覗かせます。４年生は枝打ち作業、スタッフのおじさんから手ほどきを受け、懸命にノコを動かします。下枝を伐った林は、お陰で明るくなりました。

作業のお礼に、ナメコを収穫し、学校に持ち帰ります。林業のことがちょっとわかった１日でした。

「どこの高さまで枝を落とすといいの？」

下草を刈り払ってやると、スギの子は気持ちよさそうです

２年前に植菌したナメコ。収穫を楽しみました

植えられて４年目、みんなの背丈と同じくらい伸びたよ

にかほ市

21回目となる鳥海山にブナを植える活動　《10月24日》

場　　所●にかほ市象潟「霊峰公園」
実施主体●鳥海山にブナを植える会

「鳥海山にブナを植える会」は、戦中・戦後の軍需物資や復興資材として乱伐で失われた鳥海山麓に、ブナの森を再生させようと1994年に発足し、これまで鳥海山麓にブナを中心に広葉樹を植栽してきました。(当情報誌Vol,1をご覧下さい。)

２１回目となる今年は、１２５名の会員が鳥海山麓霊峰公園に集い、育苗部の部員が丹精込めて育てた苗木を植え付けた。植樹場所は、公園として整備されたときに造成されたソリ滑りをするためのスロープ跡地。会員の頑張りで、瞬く間に植えられました。

奈良県生駒市から駆け付けた佐藤四郎さん、遠隔地でこの地まで来られない関西地区の会員のため、植栽してもらった苗木の標柱に名前を印し、１本１本写真を撮っています。これを会員に送ってやると、「1, 000円の会費なのにこんな活動をしているのか。」と改めて関心が持たれ、今後も会員として支援していきたいという声が寄せられているそうです。交流会では、「片道900kmを超える道のりだが、会えることが楽しみで毎年来ている。皆さんに元気をもらっている。」とあいさつ。これまで６年間通ったということです。

昼食時には、県南部漁業協同組合婦人部からの差し入れのサケ鍋、「森に木を植えてもらっているお礼だよ！お替わりもあるよ！」。その掛け声につられて、何杯もお替わりをする人もいます。

美味しくいただきました。

鍋料理に頑張ってくれた婦人部の皆さん

お父さんの一緒に植えた苗木に目印の標柱を立てました

植樹場所、結構傾斜があります
いつの日かこの斜面がブナの森になるでしょう

一番上を割り当てられたのは「東北電力労働組合秋田支部」の皆さん。昼食時の交流会では、「来年も仲間を募って大勢で参加します」と心強く語ってくれた

植栽を終え、みんなで記念撮影

奈良県生駒市から参加した佐藤四郎さん。今回で６回目の参加だ

山間盆地に広がる田園地帯「百宅」

緑とともに生きる

緑のムラ

百宅

ももやけ

鳥海マタギの里

百宅は、四囲を山に囲まれた山岳地帯、標高約４００ｍの盆地にある。細長い盆地は、意外に長く広い。早朝、正面に聳え立つ神の山・鳥海山が朝焼けに染まると、その神々しい絶景は、息をのむほど美しい。

そんな山中の隠れ里のような村は、古くからマタギ集落としての伝統を保ち、かつては「鳥海の桃源郷」と称えられていた。マタギの集団は、金五郎組（上百宅）、文平組（下百宅）、七蔵組（上百宅）の三つのグループがあった。さらに、京都の修験者・本海行人が伝えた本海獅子舞番楽や独特の食文化など、昔から言語、風俗、文化の様相が、他の地と異なっていた。それ故に、古くから平家落人の隠れ里といわれ、今でも村人たちの中に語り継がれている。

平家伝説のある所は、たいてい水田が開けている。多くの落人は、平地に住んでいた頃、米を食べていたからであろう。そんな典型的な田んぼが広がる百宅だが、標高が高く、鳥海山麓の冷水を利用せざるを得なかったことから、度々冷害に見舞われた。一方、そばは昔から品質が高く、名物「百宅そば」として有名である。夏の早朝、高原のそば畑は一寸先が闇のように濃い霧に包まれる。

百宅から鳥海山を望む

日本の滝百選「法体の滝」

濃い霧に包まれた「百宅そば」

本海獅子舞番楽（国重要無形民俗文化財）

猿倉人形芝居のルーツは百宅

弘法大師が修行した洞窟

鳥海マタギの里「百宅（ももやけ）」

だから山麓の「霧下そば」と呼ばれ、それが美味さの秘密である。ちなみに新そばのつゆは、イワナを焼いて干したものを、冬は山鳥、キジのガラで出汁をとった。

百宅という地名は、８２１年、弘法大師が湯殿山詣での後、この地を訪れ、「ゆうに百宅の人が住める所」と言ったことから、百宅の地名になったと伝えられている。また、大師が修業したという洞窟や、映画「釣りキチ三平」のラストシーンが撮影された法体の滝には、衣干しの岩などの伝説が残っている。こうした伝説は、鳥海修験者によって広められたものであろう。ここにも山の神信仰をもつマタギと鳥海修験者の深い関係を垣間見ることができる。

猿倉人形芝居の創始者・池田与八は、猿倉ではなく百宅の出身である。本格的な巡業を開始した明治中期頃は、池田与八の出身地にちなんで「百宅人形芝居」と呼ばれていた。その後、彼の弟子の真坂藤吉が猿倉の出身であったことから、「猿倉人形芝居」と改め定着したのである。さらに調べると、百宅歌舞伎もあった。明治時代には、盛んに上演され、町内はもちろん矢島町でも演じたという。「百宅」という地は、文化程度が極めて高いことに驚かされる。それは、山や森が芸術文化創造の根源だからであろう。

映画「釣りキチ三平」のラストシーンが撮影された法体の滝壺

トピックス

トピックス　冬の森林祭2016が開催

鳥海山にブナを植える会
◀須田和夫会長

NPO法人白神ネイチャー協会
辻正英会長▶

自然あそび親子サークル
『Akitaコドモの森』
◀小玉朋子代表

森林ボランティア団体が活動を報告

1月23日、秋田市の「アルヴェ」で冬の森林祭2016が開催されました。秋田県では、子どもの時から木に親しんでもらおうと、木とふれあい、木のおもちゃで遊ぶイベントをこれまで開催してきました。

この日、「アルヴェ」のきらめき広場には、26種類約100点もの木のおもちゃが集合、開場と同時に子どもに手を引かれた家族連れがたくさん訪れました。会場一面に散らばった木のおもちゃ、なんで遊ぼうか目移りしながらも、積み木や木のボールが入ったプールで遊んだり、お母さんと一緒に松ぼっくりやトチの実を使って工作をしたりして、楽しい一時を過ごしました。

また、会場では、県内の３企業が自社開発した木製玩具の展示・体験コーナーや、木育活動団体が活動を紹介コーナーもあり、キリンやウサギのシーソーや木製の二輪車に乗って大はしゃぎでした。

午後の１時間、この会場の一角では、「秋田県水と緑の森づくり税」を利用して活動を行っている森林ボランティア３団体が発表を行いました。

各団体からは、これまでの活動内容等が紹介されたほか、多くの仲間作りを目指すため、今年の開催の植樹会予定日や入会申込方法などの情報が提供されました。

美しく健全な秋田の森を造るため、多くの皆さんが森づくり活動に参加していただくことを望んでいます。こういった活動に関心がありましたら、あきた森づくり活動サポートセンターまでご連絡ください。森づくりに関する情報を各種提供いたします。

どれだけ積み上げることが出来るかな？

木の二輪車、何度も回りました

会場一面に出現したおもちゃの広場

お母さんと一緒に工作
何が出来るかな？

あきた森づくり活動サポートセンターからのお知らせ

森づくり活動に取り組んでみませんか

皆さんの住んでいる地域で、荒れている里山や竹林が目につきませんか。こういった里山林等の保全管理や森林資源を利活用する活動等に対して、「森林・山村多面的機能発揮対策」交付金で支援します。（図を参照）

この事業を行う場合、①３カ年間継続して実施すること、②活動組織は３人以上の会員で構成すること、③森林経営計画や森林施業計画を組んでいない森林であること、④森林所有者と協定を結ぶこと、⑤採択の面積は0.1ha以上が必要など、守らなければいけない事項があります。

この事業では、里山林保全や森林資源利用タイプでは１ヘクタール当たり16万円、侵入竹除去・竹林整備では１ヘクタール当たり38万円の交付金を受けることが出来ますが、使い道に制限があります。この事業に関心のある方は、「秋田の森林活用地域協議会」に３月末までにご相談ください。TEL・FAXは、あきた森づくり活動サポートセンターと同じです。

あきた森づくり活動サポートセンターでは、希望する活動組織に対して、計画書策定や申請業務、森づくり技術などに指導・助言を行っております。

健全な里山林を維持するため、この事業に取り組んでみませんか。

地域の文化財的価値のある周辺の
森林を整備し、地区景観を維持する活動

過密状態になった侵入竹を整備し
周辺森林への竹の侵入を防ぐ活動

情報誌の発送について

今回は、５０名以上の会員のいる団体には、５０部を送らせていただきました。さらに部数が必要な場合はご連絡下さい。別便でお送りします。

あきた森づくり活動サポートセンター（愛称：モリエールあきた）
〒019-2611
秋田県秋田市河辺戸島字上祭沢38-4　プラザクリプトン内
TEL 018-882-5570　FAX 018-882-5571
E-mail：akt-forest@triton.ocn.ne.jp　HP：www.forest-akita.jp/